(C)佐賀新聞社

ろんだん 佐賀



池松 英治さん

ひよ子こども園かみみみね園長

いけまつ・ひではる　1969年福岡県久留米市生まれ。佐賀大教育学部卒。クオリティゼミナール塾長・ひよ子こども園かみみみね園長。2025年から同こども園グループ４園の統括園長。幼児から大学受験生まで個々の成長に合わせて教育する。佐賀市。

教育者とは誰か

最も影響与えるのは保護者

私は保護者の方に、「お母さんは教育者ですね」とお伝えすることがあります。すると、「いえいえ、私は先生ではありません」と返ってきます。しかし、私が使う「教育者」は職業を意味していません。子どもの可能性を信じ、その力を引き出そうと関わる人のことです。一方で、「先生」と呼ばれる立場にあっても、子どもを管理したり、言うことを聞かせたりすることに意識が向き、その子が本来持っている力を伸ばせていなければ、肩書だけで教育者とは言えません。

ある程度の力がついてきた生徒には、自ら学ぶ力が育まれるよう、あえて何も指示せず、時間だけを与えることがあります。しかし、中には「先生は教えてくれない」と親に話し、「この子は何をするか言ってもらわないとできないのです。宿題も出してもらわないと家ではしないのです」と言われることがあります。こうやって主体性の芽を摘んでしまうこともあるのです。子ども時代に、自ら学ぶ喜びを十分に味わえなかった親ほど、「勉強は教えてもらうもの」と考えがちです。子育てには親自身の経験も大きく影響します。主体性とは教えられるものではありません。だから難しいのです。

ひよ子こども園にはブルーベリーの木があります。

私は先生方に、「『先生、食べていいですか』と聞く子ではなく、自分の目で確かめ、『熟しているから食べる』と判断できる子に育ってほしい」と伝えています。

「危ないから食べさせない」と考え、最初から遠ざけることが保育現場では少なくありません。しかし私たちは、保育者が見守り、子どもたちが果物に触れる経験を大切にしています。

園庭で、「お母さん、これはまだ酸っぱいから、こっちがいいよ」と親子がブルーベリーを味わう姿を見るたびに、幼児期の関わり方の大切さを実感します。

入塾の面接で、「私にはこの子しかいないのです。どうか引き受けてください」と深々と頭を下げられたお母さまの姿を私は今でも忘れることができません。ご苦労された経験から、「この子には同じ思いをさせたくない」と小学４年生のお子さまを連れて来られました。その後、お母さまは私の助言を参考にしながら、年齢に応じた関わり方を実践されました。彼が６年生になった頃、私はその可能性を信じ、あえて少し過激な言葉を掛けました。

「中学で一番になりなさい」と。

実際に一番になり、現在は九州大学で学びながら少林寺拳法に打ち込んでいます。大学へ進学し、一人暮らしを始めた時、彼は初めて自分の部屋を持ちました。その姿に、お母さまの歩んできた年月が重なりました。家庭の経済状況で、子どもの未来が決まるわけではありません。子どもを信じ、学びながら関わり続けることが、その子の人生を大きく変えることもあるのです。私はあのお母さまこそ教育者だと思っています。

子どもに最も影響を与えるのは、学校の先生でも園の先生でもなく保護者です。だからこそ、子どもを保育・教育することは、保護者を支えることでもあります。私は園庭での何気ない立ち話を大切にしています。

佐賀新聞社 ※無断複製転載を禁じます。